

要 約

近年、学生を対象に精神障害者との関わりに焦点をあてた研究が多くなされている。

高畑(2005)、岡田(2013)の研究では、大学生を対象にした研究において、ボランティア活動の参加前後で精神障害者に対するイメージが変化したという結果が明らかにされている。また、青年期において自己意識の発達が重要な課題と指摘されている(平石, 1991)。しかし、精神保健ボランティア活動を行うことにより、この自己意識に変化があるのか、活動を継続することによってどのように変化するのかはまだ明らかにされていない。

以上のことから、本研究では精神保健ボランティア活動を行う過程で精神障害者に対するイメージと自己肯定意識、自己受容、他者受容にどのような変化があるのか、活動期間における変化過程の検討を目的とする。

調査方法としては、縦断的な質問紙調査と一時点のフォーカスグループインタビューを行った。対象者は、精神保健ボランティアを行っている大学生であった。活動期間に応じ、「開始群」と「継続群」に群分けした。

質問紙調査を用いて、開始群の尺度得点の平均値を算出し、継時比較を行った。その結果、全ての尺度得点において、ボランティア開始前から3ヶ月後では得点が高くなり、3ヶ月後から6ヶ月後では顕著な得点差は見られず、6ヶ月後から12ヶ月後では得点が低くなった。

フォーカスグループインタビューを継続群に行った結果、『精神障害者へのイメージの変化』『他者理解』『他者受容』『自己理解』『自己受容』『安心感』という6つのカテゴリが生成された。

以上の結果から、本研究では1年の精神保健ボランティア活動の継続では一方向の心理的变化が見られたとは言い切れないと結論づけた。イメージについては、実際に精神障害者と関わる経験が精神障害者のイメージの向上につながる可能性があり、自己意識については自分自身や他者を良い面も悪い面もあるという包括的な理解し得る傾向があると結論づけた。